



# 第五回 石井十次賞

社会福祉法人、うみのほし会浦上養育院へ贈呈  
 平成八年四月十一日石井十次生誕  
 記念式典当日に正賞「楯」と副賞  
 が贈られた。



第五回石井十次賞として、  
 長崎市石神町社会福祉法人  
 うみのほし会浦上養育院  
 (理事長松尾マツエ氏)が  
 満場一致で決まったことを  
 報告される。  
 「石井十次賞」選考委員黒  
 木武弘氏(社会福祉医療事  
 業団理事長)



「石井十次賞」贈呈式  
 町民多数参加のもと、第5回石井十次賞贈呈式が、  
 高鍋中央公民館にて盛大に行われた。



石井十次顕彰会理事長長崎一男より第5回受賞者・  
 社会福祉法人うみのほし会理事長松尾マツエ氏へ正  
 賞・副賞が手渡された。

## 石井十次賞選考委員会

—東京都千代田区紀尾井町にて—



「石井十次賞」  
 正賞の楯  
 (石井十次の  
 ブロンズ像と  
 茶臼原憲法)



慎重審議の中の選考風景



受賞者  
 社会福祉法人うみのほし会  
 浦上養育院理事長  
**松尾 マツエ 氏**

浦上養育院は、明治七年岩永マキによって創設され、  
 明治十年在俗修道会「十字会」によって引継がれた。  
 昭和二三年、児童福祉法の施行と同時に養護施設浦  
 上養育院として、要保護児童の育成にあたり、更に昭  
 和三九年四月社会福祉法人うみのほし会の設立によっ  
 て、その内容をいっそう充実させ今日にいたっている。  
 岩永マキが天然痘で両親を失った孤児を引取り、  
 「小部屋」と呼ばれる施設で養育したのが始まりで、  
 その間、キリスト教の精神に基づき、深い愛情のうち  
 に、創設以来一二年間にわたり、家庭的に恵まれな  
 い児童三千余名を養い育て、社会福祉に貢献してきた  
 伝統と歴史をもっている。

第二次世界大戦下では、原爆により施設は全壊全焼  
 し、収容者や職員に死者、負傷者多数を出すなど、幾  
 多の困難をのりこえ継続的経営がなされてきた。

特に、児童養育のため、社会生活に対応できる自立  
 心を基調とした、養育指導に重点がおかれ、高学年に  
 はアルバイトの奨励、家庭的料理づくりの実行や全員  
 高校に進学させておりボランティア支援による一対一  
 の個人指導等、学習面にも努力が図られている。命を  
 尊び、畏敬の念をもつ、真の自由を解し、規律を尊重  
 できる、自分の生活を創り出し整え、共同の場、将来  
 は社会の場で自分の役割を果たすことのできる子ども  
 等、又限られた生活の範囲だけでなく、世界に目を向  
 け六年前からは、世界に、手を貸す運動にとりくみ西  
 アフリカの恵まない子ども達へ、小遣い銭やおやつ代  
 の節約で、貯めたお金を献金するなど、日常生活のな  
 かで親切や思いやりを実践できる子どもにも育てる養育  
 が施されている。



明治7年、岩永マキによって創設された浦上養育  
 院、以後数回の増改築により維持されてきた。  
 昭和59年、院舎全面改築により現在に至っている。



岩永マキの銅像  
 浦上養育院創設者



長崎県養護施設球技大会  
 高田県知事をまじえて。



茶席風景(茶道クラブで美しい心の道を)



## 表彰意見発表

平成八年四月十一日の石井十次生誕記念式典に於いて、高鍋町内の小学校、中学校、高等学校の児童生徒の代表の皆さんが「石井十次先生の顕彰意見発表」をされたものです。  
高鍋町内に小学校、中学校、高等学校各二校があり隔年毎に交代で行われております。



高鍋東小学校  
五年  
二川 敬士

### ■「石井十次先生から学ぶべきこと」

「孤児のため いのちを捨てて働かん 永の眠りの床につくまで」

ほくは、東小学校入学以来、教室にかかっている石井十次先生の肖像画に出会っていろいろなことを学びましたが、一番感動したことは医学の道をすてられ孤児を助けるため一生をささげられた点です。

特に、故郷の人々の十次先生への期待や恩師の菅先生への反対に悩みながら、医学書やノートを石油をかけて焼いてしまわれるところは、ほくにはとつていてきかないなあと感じます。

先生のことについて記された資料をもとに道徳の授業で学習したとき、先生の当時の気持ちや考えることは大事だけれども、これからほくたちは何をしたらよ

いのか考えることも大事なのだよと担任の先生が最後におっしゃいました。

現在の世の中で、福祉という言葉をよく耳にします。知識としての福祉は学校や本で勉強できますが、高鍋町の住民一人一人生きるとがたの中に福祉の理念がどれだけ身につけられていくにかかっているような気がします。ですからただ「おとしよを大切にしよう」とか「障害者の方に愛の手を」といった声だけをかけあっても身につかないのではないのでしょうか。

こまっっている人や苦しんでいる人を目の前にして、思わず手をさしのべたり、声をかけたり、いっしょになって考えたり、行動をともしたりすることは、りくつや知識だけでその人の生き方としてかんたんに身につくようなものではないと思います。

石井十次先生のように井戸に落ちそうな小さい子どもを見て思わず走り出すという人間としてあたりまえのしぜいを身につけることから始まると思います。

このように考えると、ほくたちがなくてはならないことは、今自分ができるあたりまえの行動のようです。

あいさつや返事をきちんとすることやちりやこみを見たらすくひろつこうという行動が積み重なったときに大きな実を結ぶと考えます。またそれが石井十次先生から学んだことを実行することにつながると思います。今後、高学年生としてこのことをつねに頭に入れて、学校全体を見通した学校生活を送れるような自分でありたいと考えています。



石井十次、中学校社会科の歴史教科書に今年度から掲載される。

### 児童福祉につくした人

このころ、生活に苦しむ人々のなかには、子どもを養えなくなる親もありました。しかし、政府の対策は不十分で、社会福祉も民間の慈善事業が中心でした。宮崎県出身の石井十次は、こうした子どもの救済に生涯をささげました。岡山で始まったかれの活動は、支

援者を得ながら広がり、孤児や天災にあった子どもたちを全国から引きとり、その数は多いときには1,200名に達しました。かれは、宮崎の茶臼原原野に施設を移し子どもたちとともに開拓を行いながら、その教育に努めました。

教科書掲載の内容 ▲

発行者東京書籍株式会社



高鍋東中学校  
二年  
橋 直美

### ■「孤児の父」石井十次の教え

——豊かで強い心をもつ——

石井十次は、「孤児の父」として多くの人に知られています。私たちが小学校に入ると石井十次について道徳の時間等で教えてもらいます。

その中でも「縄の帯」の話は感動的でした。この話は多分誰もが忘れずにいるのではないのでしょうか。

私も、話を聞いたとき胸が熱くなったのを、今でもしっかり覚えています。その時「私にはできるだろうか。私はきっと見てみぬふりをするのではないか」と思いそのことを感想に書いたのです。

それから少しづつ「孤児の父」の偉大さが分かり始めました。今まで苦労して学んできた医学の道をあきらめ、「医者を目指す者は他に多くいるが、孤児を救おうとする者はいない。」と医学書を焼き孤児救済という至難の道を選んだ石井十次。どんなにつらくとも、どんなにどん底の生活が続いても強く生き抜いた石井十次。

私はめんどつな事があると「どうしようか。私がしなくても誰かがするだろう。」とついつい思ってしまう。思うまではいいのですが、結局行動せずに終わってしまうことがあります。そんな時はとても不愉快

快な気持ちになり、自分がとても小さく見えます。

こんな「心」の教えも石井十次はしています。

「親のない孤児よりもいっそうかわいそうなのは「心の迷い子」「精神の孤児」だと言っています。中学生となり、ようやく私はよくこの事がわかり始めました。今社会ではいろいろな事が問題になっています。私たち中学生では「いじめ」「自殺」が多くなっています。

これは石井十次のいっている「心の迷い子」「精神の孤児」の事ではないでしょうか。

相手を思いやり、相手の気持ちになり、相手の立場に立ち、豊かな心で石井十次の教えの様に「心の迷い子」「精神の孤児」にならないようにみんなで気をつけて楽しい学校生活を送りたいと思います。

「孤児の父」石井十次の教えのもとに……。



宮崎県立高鍋農業高等学校  
三年  
宮崎 憲治

### ■石井十次先生に学ぶこと

石井十次先生は「福祉の父」と称されています。私は最近考えていることは、この「福祉」から連想されるボランティアというものの意味です。ニュースや新聞などでもこの言葉を見聞きする機会が多くなっています。

私たちは言葉として耳にし、こういうものだとわかって「ああそうか」と思う、多くの人はこの程度の認識しか持っていないのではないのでしょうか。ボランティアとは本来、自発的活動であり福祉性を持ち、無償の行為でさらに継続性がなければなりません。こうやって言葉に直せば意味としては理解できます。しかしこれを実行にするとすればなかなか難しいものです。

「何かしたい」と思っても、どうすればいいのか、何が出来るのか、と考えている内に機会を逃してしまっているのが実状ではないでしょうか。

先生には幼い頃より人を思う心が強かったと聞いています。

その心がやがてキリスト教の精神と融合して、孤児救済を自らの使命とするに至ったのだと思われまふ。その過程での多くの人との出会いが先生の心の向く方法を決定したのではないのでしょうか。私たちが、先ほど述べたように第一歩を踏み出せないでいることは、ボランティアを自分の事として考えていないからではないのでしょうか。「困っている人を助けてあげる」というような発想では、ボランティア活動を行う上で躊躇することの解決には結びつかないでしょう。ボランティアとは本来、対等な人間関係のうえに成り立っているものです。ですから活動を行おうとしている人も例えば「こんな俺でも役に立つんだ」という達成感という喜びを感じることが出来るはずですよ。しかしながら、自分が無理をして自分自身が苦しみを味わっているだけでは何のための活動なのか分からなくなりまふ。石井十次先生は孤児達のために苦しい思いをしながら懸命に活動をされました。先生を支えていたのは信仰と強い使命感だったのです。私たちが先生の偉業を聞いたときに、同じ事をやるのかなど考えても出来るも



!!今だからこそ、福祉を原点から考えてみよう!! のキャッチフレーズのもと、平成8年9月岡山県成羽町立美術館で行われた石井十次展  
画家児嶋城次郎(石井十次娘婿)出身地



岡山で初の十次展開会式のテープカット  
(高鍋町、石井記念友愛社、石井十次顕彰会協力)

のではありません。しかしながら私たちは自分たちの出来ることは何かという事を具体性のもてる範囲で考えてゆかなければならないでしょう。

一回ごとのボランティア活動でも何か始めなければ先には進みません。私は現在生徒クラブ会長を務めています。私は、「何から始めたらいの」と思っている人たちの心をまとめて、何か形にできたらと考えています。

ところで、先生の孤児教育の根幹には「自然とのふれあい」という理念が流れていました。そこで、それに最も適するものとして農業教育を掲げられました。これを実現化するために、茶臼原に移転されました。私は高校で農業を学んでいます。将来は自営を目指していますが、先生のこの方針を知ったとき、農業を学ぶ者として共感を覚え親近感すら感じました。農業を学ぶときに一番大切なことは、生き物が相手であるということです。

私たちが生命の尊さを肌で感じながら勉強しています。先生の強い個性というべき人間愛の具現化されたものが農業であったと思います。

先生は「福祉の父」として、現在福祉制度にあたるものを自分の信仰に基づいて実行されました。そして現在では多くの事業が行われています。私たちは、このような事業に、もっと関心を寄せて行かなければならないと思います。そのような中にこそ私たちの心にある「何かしたい」という気持ちを生かせる場所があるのではないのでしょうか。そして行動を起こす勇氣を先生の生きざまの中から私たちは学びとらなければなりません。今後、私は先生の教えにならい言葉としてのボランティアではなく、行動としてのボランティアを目指してゆきます。

